道だった。だから、鉄路の先に異郷があるという幻想が、近代の村落に生きることの根拠にもなったのである。それを剥ぎとってしまうという行為は、村落を潰してしまうこと以外にはほとんど何の意味も持たない」、一方、「道路は、村落と異郷を繋ぐものにはならない。村と隣の村、そこと隣町とを繋ぐのが道路で、それは、どこまで辿っていっても異郷に行きつくものではない」、大変興味深い分析だと感じました。

三浦　私は旧美杉村の丹生俣という一番奥の集落で生まれ育ち、普段どこかへ出掛けるためには、峠を越えて比津駅まで行き、そこから名松線に乗るしかなかったんですね。当時はまだ蒸気機関車でしたが、汽車に乗ることは一つの憧れでもあり、それに乗ると、名古屋にだって東京にだって、あるいは伊勢にだってつながっている、まさに夢のような世界へつながっているんじゃないかという幻想を小さいころから持っていたんです。

　最初に村落伝承論が出版された1987年は、国鉄が民営化されＪＲになった年で、全国で支線の廃止が進み、名松線も廃止になるのではないかと地元では大きな話題になっていました。そういう時だったので余計に思い入れがあって、そんな風に書いたのです。

市長　名松線は、当時も被災しており、復旧するために投資したので廃止を免れた、という見方も書かれていますね。平成21年に再び被災した時にも復旧できるのかどうか、大議論がありましたが、最終的にＪＲ東海、三重県、そして津市の間で協議が整い、いよいよ平成28年春に全線復旧を迎えます。これは美杉地域の皆さんはもちろん、白山や一志地域の皆さんにとっても、非常に思い入れの深いものがあると思います。名松線のこれからについては、どのようにお考えですか。

三浦　全線復旧は大変うれしい話ですが、一方で採算面や営業面での不安もあると思います。それでもやはり、単に効率化とか採算という面だけを考えるのではなく、美杉村を、合併により一体となった津市として大きく捉え直し、その中で美杉という場所をどのようにしていくのかということとも関わってくるのではないでしょうか。道路とは違う形で、鉄道を生かしながら、共同体を活性化するにはどのようなことができるのかを、みんなで知恵を出し合って考えていければいいなと思います。

市長　鉄道が一時寸断された時、地域の人々が鉄道でつながっていたいという気持ちが12万人近い署名につながる。まさにそれは、人々の心のつながりが、名松線のこと

立正大学大学院文学研究科長　三浦 佑之（すけゆき）さん

1946(昭和21)年に津市（旧美杉村）に生まれる。県立津高校、成城大学文学部を卒業。同大学で博士課程単位を取得後、共立女子短期大学、千葉大学を経て、現在立正大学大学院文学研究科長。古代文学を専攻し、伝承・昔話や地方の言語などを多岐にわたり研究。1987(昭和62)年に『村落伝承論』(五柳書院)で第5回上代文学会賞を、2002(平成14)年に『口語訳 古事記』(文藝春秋)で第一回角川財団文芸賞を受賞。